
最後の花

華月&花散里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の花

【Nコード】

N0389Z

【作者名】

華月& a m p ·花散里

【あらすじ】

瑛姫の死を迎える初代総大将夫婦

その時の互いの胸の内は

華月と花散里合同企画でそれぞれの視点から描きました。

自サイト掲載時は、山吹乙女がまた出ていなかったため、鯉伴独身設定になっています。

瑛姫（前書き）

瑛姫 華月

瑛姫

がりりつと、板の間に爪を立てる。

硬いくせに妙に脆い爪は、固い檜の床板に擦れ、食い込むことな
く欠けていく。かつては白魚と称えられた指はささくれ、その肌は
枯れ木の皮を思わせた。

荒い息をつく肩から滑り落ちるは、枯れ薄色に色を変えた、古い
皮衣のような髪。

桜と例えられたのは何時の日か……

いや、咲き誇る桜は、散り散らした醜さは、人のいや女の盛りと
老いを表しているのか……

周りの妖達はその容姿が変わることはない。見た目も、その心も
老いることを知らぬように。

今も妖達との宴を、総大将の隣に座り、共に楽しんでいたのだが
…… 鬼女達の目が、雪女の表情が、老いた己を嘲笑う様に見え、気
疲れを盾に席を辞してきた所だ。

「わたくしは……浅ましい」

人である自分は、どう頑張っても老いと死からは逃れられない。

では、己が路傍の露となったとき、愛しい妖様の隣は誰が座るのか
…… 誰よりも愛しい妖は、あまりにも人の心の機微に疎い。誰より
も己を愛しいと言いながらも、老いた容姿を気にする瑛姫の苦悩に
は気づいていない。気付かぬからこそ、昔と変わらず自分に接して
くれる。だからこそ、辛い。いつか美しい女人…… 女怪かもしれぬ
…… が現れ、妖の心を動かしたら、瑛姫など檻褸^{ほろ}屑^{くず}のように忘れ去
られるやもしれぬ。

「鯉伴……」

愛しい我が子を思う。

奴良組二代目を襲名した我が子は、年老いた母を心配し、薬師一
派に少しでも滋養の良いものが手に入れば、率先して母の元に届け

させる。

だが、もしあの子の心を占める人が現れたら？ 年老いた母など忘れてしまつかもしれぬ。あの子もまた『ぬらりひよん』なのだから。

そして何より、自分の回りにいるのは『妖怪』なのだ。

自分の死後、その軀はどうなるのだろうか？ 雪女が氷漬けにして床の間に飾ってやる、と冗談混じりに笑っていた。路傍に打ち捨てられ、獣の餌になるか、と聞いてきたのは狒々だったか。それらを聞いたとき、ゾツとした。忘れられるのも辛い、しかし、死して屍を晒し続ける恐怖は口にすることすら出来ぬ。せめて……せめて

……

「瑛姫、具合はどうだ？」

はっ、と顔を上げる。

「妖怪……先ほどは失礼しました。」

床から上半身を起こし、寝室に入ってきた妖を迎える。

「いや、雪麗に叱られた。疲れている姫を無理矢理宴に連れ出すな、とな。」

自分を心配して、枕元を座るぬらりひよんを、嬉しくも心苦しく思うと同時に、どす黒い何かが胸にモヤモヤと沸き上がる。何故そこで雪女の名前が出てくるのかと。いや、雪女も心配してくれているのはわかる。だが、かの女怪は、妖の主に長く想いを寄せ続けているなかつたか？ 自分が、露と消えた後、妖の主に寄り添うつもりではないか……

暖かな寢床の中で、己の腕に爪を立てる。愒気を妖の主に気付かれないように……

「いえ、楽しい時間でした。皆様に、わたくしの退席で気を使わせたのなら、申し訳なく……」

軽く咳き込む。ぬらりひよんは慌てて、羽織を瑛姫の瘦せた肩に掛ける。ふと抱き寄せる。

「妖怪？」

「……儂を置いて行くのか……」
何処へ、とは言わない。

「……死して頼るものはなく、只仏祖の教えを頼りに黄泉路を行かねばなりません。こればかりは人として産まれた者の定めにございます……」

「……願わくば……と言葉を飲み込む。声にすれば泣いてしま

う。
「妖の主よ、総大将よと言われても、唯一つ思い道理にならぬものがある」

ぎゅっ、と強く抱き締める。深く年輪を刻んだ頬に、滑らかな肌が擦り寄せられる。

「命の儂さ」

びくり、と喉がひきつる。

「神仏を斬り倒して姫の命を永らえたい。」

「……死にたくない……」
我慢していた言葉が、こぼれだす。

「妖様と未だ見ぬ景色をみたい。鯉伴の連れ合いとなる人を見たい。鯉伴の子を抱いてみたい……死にたくない……死にたくない……一人になりたくない……」

瘦せた指がぬらりひよんの羽織の袖を握り締める。

「妖精以上に頼れるものが、神仏に在りましようか？ 死にとうありません……」

幼子のようにしゃくり上げながら、ぬらりひよんの胸にしがみつく。

「姫……」

「すぐりつく瑛姫をしつかりと抱き締める。」

「儂がしてやれることはあるか？」

妖に、現世に生きる者に、黄泉路を行かんとする者の為に、何が出来ようか？ 共にありたい、以上に望むものが在るうか？

「……一つだけ、わがままをお許し願えますか？」

何度も何度も願いながら、口にできなかつた願い。

「わたくしの姿を……できれば妖様に出会った頃の姿を、妖様の背の百鬼にお加えください。……妖様の後を何時までも共に歩けるように……」

「……直ぐに腕の良い彫物師を呼ぼう。儂の背に、姫を背負ってやる」

秋風に微かな冬の色が混じる夜は、静かに更けていった。

「母上」

初雪の便りが聞こえた朝、瑛姫は涅槃に旅だった。

「親父」

妖の総大将の背にいつの間にか、大輪の花を抱いた癒しの姫の姿が柔らかに微笑んでいた。

「母上」

ぬらりひよんはさみしがりの妖だから、けしてその姿を見失ったりしないだね。暖かな笑顔から光が消えた。

「親父」

中庭の枝下桜の下、総大将が小さく肩を丸めていた。

白い雪が全てを隠していった。

笑顔も涙も……

総大将（前書き）

総大将 花散里

総大将

冬の凍てつく朝だった。

その日は前日からたちこめた重い鈍色の雲が厚く空を覆い、まるで耐えきれなくなったように白い雪の涙を降り注いで地上の悲しみを悼んだ。

「瑛姫ーっ！！」

絶叫が迸ったのはまだ早朝の陽さえさしこまぬ凍えた時間だった。

その声を最後に、雪は静かに白く屋敷を染め始める。世界を白と黒が織りなす、弔いの色へと染め変えていく。

鯉伴は早朝に息を引き取った母の遺体の側に付き添いながら、ずっとその老いて色をなくした髪を顔から払ってやった。

ただ眠っているだけのように見えるのに、母の顔はもう笑うこともなければ、その皺が呼吸に動くことさえない。

死んでしばらくすると体が強張り表情が変化していったが、それでも安らかだった。

外は今も雪が降り続けている。

「親父は？」

朝、枝垂れ桜の木の下で見て以来姿を見かけない父を納豆小僧に尋ねた。

「さあ？　そういうば、見ませんね」

「人間が死んだら、どうしたらいいんだ？　俺はせめてお袋を弔ってやりたい」

「うーん、むしろ生粹の妖怪ですからねえ。元々は人間でお寺にいたという牛鬼様なら何かご存知かもしれませんが……」

「この雪の中、近江まではいけねえ。誰か知らねえか？」

しかし妖怪達はみんな困ったように首を振った。

それも仕方がない。妖怪が人を襲えば、生き肝を食らい、骸など道端に打ち捨てて。人間だつて似たようなものだ。一人一人弔いが出せるのは、比較的余裕がある状態の時で、疫病などが流行ると遺体は河原に野晒しにされ死臭と虫の大群に覆われてその生の終わりを迎えるのだ。野犬に貪られる死体、金目の物を漁られる死体、そんな姿はこの時代悲しいほど日常的だった。

「とにかく親父を連れてこなきゃ始まらねえ」

火鉢にかけられた鉄瓶がしゅんしゅんと音をたてる部屋を出ると、鯉伴は白い息を吐きながら父の姿を捜した。

父は 朝と同じところにいた。

その金味を帯びた銀髪に溶けかけた雪をかぶり、着物も冷たく湿った姿で枝垂れ桜の下に立ち尽くしていた。

「なにやってんだよ!? 親父!」

「……鯉伴」

振り返った父は今までに見たことがないほど憔悴した顔をしていた。人ならば、十も老け込んで見えるとはこの状態をいうのだろう。

「なんで瑛姫は儂をおいて逝くんじゃ」

「仕方ねえだろ お袋は人間なんだから……」

いつもは力強い父がひどく弱々しく見えて、息子はそつと手を伸ばした。

「帰ろう。俺がお袋の代わりに手を繋いでやるから」

幼い頃、お父さん手を繋いでとねだつてきた息子の姿を思い出し、ぬらりひよんはそつとその手を取った。

手はいつの間にか大きくなっていた。

むかしは握り込んだだけで折れてしまいそうな程小さかったのに、いつの間にか父の手を引けるほどに大きく逞しくなっていた。

部屋に戻り、横たわる瑛姫の側に総大将は座ると、瑛姫の顔に白い布をかけようとした雪麗を制した。

「やめてくれ。瑛姫が苦しがる」

「総大将……瑛姫様は……」

納豆小僧が口を挟んだが、雪麗はそれをおさえると布をしまった。

「わかったわ」

そして二人きりにしてやろうと納豆小僧の襟を掴み、部屋を後にした。

四方を閉め切られた部屋の中にはぬらりひよんと瑛姫だけが残された。

「のう姫、面白い話を聞いたぞ。狒々がな、街で女に間違えられたそうじゃ。それで女に逢いたくばここに行けと教えた先が牛鬼の屋敷での、さんざんな目にあって帰されたらしい」

しかし瑛姫は静かに横たわり続ける。

「面白くないか　ならば、先週の出入りだな。と、しまった！

内緒でやった出入りをばらしてしもうた！」

瑛姫はただ横たわり目を閉じている。

「瑛姫　怒らんのか？　いつも出入りと訊くと危ないこととして！

って怒ってくれるじゃろうが」

だが瑛姫の顔は安らかなままだ。

「なあ、お瑛　」

起こそうと揺すった手は雪のように冷たかった。

「起きよ！　まだ器はあるのじゃ！」

だが瑛姫は答えず、やがて力をなくした総大将の手がその老いた手から離れ、やるせなく自分の膝に戻された。

雪は静かに降り積もっていく。

次の日になっても、ぬらりひよんは弔いと言う息子の言葉を拒んだ。

ただ瑛姫の遺体の側に座り、話しかけたり顔を見続けたりしている。

その瑛姫の軀には段々と変化が出始めた。

白蟻の色であった手に幾つか紫色の痣が浮かび始めたのである。

冬とはいえ、火鉢を置いていた部屋は暖かく、生臭い魚の腸のような死臭が満ち始めた。

美しい瑛姫の鼻から耳から血の滴が溢れ出し、それは悲しいことに軀が内から腐り始めたことを意味していた。

「湯灌ゆかんをしてやらねばなりません」

知らせを聞いて駆けつけてきた浅茅が原の鬼女達が、鯉伴にそう申し出た。

「親父。お袋に湯灌をしてもらおう」

「湯灌？」

「風呂に入れて体を綺麗にしてやるんだよ」

「そうか。それなら瑛姫も喜ぶの」

そう承諾したものの、やがて湯船に鬼女達によって入れられ、部屋で着物を整えられた瑛姫の姿を見て、総大将は顔色を変えた。

「何故耳や鼻に詰め物をしたのじゃ！」

「親父！」

「取れ！ これでは瑛姫が目覚めた時苦しむではないか！？」

「親父！」

と鯉伴は走ってくる父の姿を両腕で止めた。

「言いたくなかったが、お袋の体で綺麗なのは寝かせて上になっていた表面だけだ。背中は……もう死斑で真紫なんだ。腕も、足も……」

…体中の血が腐って、穴があれば流れ出すんだ」

総大将の目が見開かれた。

「嘘じゃ！ お袋はまだ生き返る！ 生き返れる！ 死んで妖怪になりかわった者も多いではないか！？」

「親父！ 諦めてくれ！」

息子は必死で父の体を受け止めた。

「それだけお袋は幸せだったんだ！ 人間として死ねたんだ！」

「嘘じゃ！ 思い残すことが一杯あると言っておったではないか！ だから、僕は、僕は ひよつとしたら甦ってくれんかと！ 未

練をはらす為に妖怪になって帰ってきてくれんかと、それだけが支

えじゃったんじゃ!!」

背中の彫り物だけでは儂はお前の姿を見ることができん!

ぬらりひよんはもがいて息子の腕を飛び出すと、死に化粧を施され、白い死に装束を纏った妻の元に駆け寄った。

「瑛姫……戻ってきてくれ。お前にはもつと望みが一杯あったじゃろう?　なのになたつた一つ叶えただけで満足してしまうのか」

儂の背で笑えれば、もうそれで何もいらぬのか……

「お瑛」

総大将は妻の氷のように冷たい手をただ握りしめた。

次の日には死臭は鼻を覆う程の強烈なすえた匂いで屋敷に満ちた。お香を幾ら焚いてももう慰めにもならない。

瑛姫の美しかった顔のあちこちに小さな紫色の斑が浮き上がり、その数はゆつくりと広がっていった。

口の中は血だまりとなった綿花で溢れ、耳や鼻に詰めたそれも赤黒くなっている。

白い手は死斑で埋まり、生前の面影が失われるのは間近だった。

目の前で腐り続けていく妻を為す術もなく見ていたぬらりひよんは、肩に置かれた鯉伴の手にふと正気に返った。

「親父　お袋を土に埋めてやろう」

これ以上、美しかったお袋の無残な姿を晒すのは忍びない……暫くぬらりひよんは動かなかった。

そして瑛姫の顎に浮き始めた死斑を見つめ、小さく頷いたのだ。

部屋を出ると、いつの間にか知らせを聞いて駆けつけてきた組の者達で廊下は埋め尽くされていた。

「瑛姫を　弔ってくれ」

力のない声で呟かれた言葉に、一つ目入道は厚い手を総大将の肩に置いた。

「まかせときな。一応仏道に身をおいてるんだ」

そう言うと、すぐに居並ぶ幹部や本家の者達に指令を出し、花や棺位牌といった葬式の手配を始めたのである。

冬の為、あつたのは寒椿ばかりだったが、美しい花に棺を囲まれ、設けられた檀の前で一つ目入道の読経が響くのをぬらりひよんは呆然と見守っていた。

ふと周りを見ると、雪麗が目を真つ赤にしており、狒々は顔を能面で隠しているのに膝に水がこぼれたようなしみができあがっていた。

鴉天狗も泣き続け、木魚達磨さえもが鼻をすすっていた。

式が終わり、後は埋葬となった時、一つ目が確かめた。

「どこに埋めるんだ？」

ぬらりひよんは答えた。

「そのの、枝垂れ桜の下に……瑛姫は一人になりたくないと言っておった。そこなら、寂しくないじやろう」

すぐに鋤や鍬でまだ若い枝垂れ桜の根元が掘り起こされ、深い穴ができあがった。

白い棺に釘を打ちつけ、縄で縛ると、その深い黒い土の中へと縄を下ろして横たえていく。

縄はそのまま土の中に投げ入れる。

「最初の一かけは家族がやることが多いが、どうする？」

「一つ目のその言葉に、ぬらりひよんは鍬を受け取った。

「やる　瑛姫は儂の妻じゃ。最後まで全部儂のもんじゃ」

どんなに悲しいことでも譲れない。

そう思うと、ぬらりひよんは粉雪の舞う中、積み上げられた黒い土を一掬いし、白い棺の上に投げ落とした。

とさりと白が黒に少し埋まった。

「後は儂らがやつとく。鯉伴様は総大将を頼む」

「わかった、頼む」

そう言うと、土に埋められていく妻を見なくてすむように、息子は父の腕を取り歩き始めた。

白い粉雪の舞う中で、ただ息子の背を見ながら、ぬらりひよんの耳には土を投げ入れる重たい音だけが、どさりどさりと響き続けた。

季節は巡り、暖かな全てが芽吹く季節が回ってきた頃、枝垂れ桜はまた美しい蕾をつけ、爛漫の空気に満ちた日にそれを青い空から花開かせた。

その根元には瑛姫の軀が根に全ての養分を奪われるように絡んでいることだろう。

「瑛姫」

木に凭れながら、ぬらりひよんは上から垂れ下がる花に手を伸ばした。

「儂はお前を背中に背負つとる。だからいつも一緒じゃ。だがのう背中では儂にはお前が見えんからちよつとだけ寂しいんじゃ」
だからと総大将は花に手を伸ばした。

「こつやつて、一年に一度だけ、儂にその笑顔を見せてくれ。そうすれば儂はお前の笑顔を忘れんですむ」

まるでその言葉に答えるように枝垂れ桜は風に揺れ、その長い枝で総大将の周りを包んだ。

それはまるで花が腕のように伸び、背中からぬらりひよんを抱きしめているかのように見えた。

「瑛姫 儂らずつと一緒じゃ」

優しい妻の腕に応えるように、ぬらりひよんはそつと桜に口づけた。

総大将（後書き）

お読みくださり、ありがとうございました。

これは企画で二人で死を前にした夫妻をそれぞれから書いた作品です。

前半を華月、後半を花散里が担当しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0389z/>

最後の花

2011年12月2日22時51分発行